

第二十四回「心の花賞」発表

第二十四回「心の花賞」受賞作品

服部崇「極秘」

賞Ⅱ賞状および『佐佐木信綱全集』

選者賞Ⅱ各選者の著書、記念品

奥田亡羊賞 矢部雅之「孤独ではない」

駒田晶子賞 岡嶋摩美「花の雨」

田中拓也賞 廣間菜月「ずつと迷子」

俵万智賞 笠巻睦「東京悪事」

選考委員（選者）

佐佐木幸綱、奥田亡羊、駒田晶子、田中拓也、俵万智

選考経過

①応募総数 八十九

②佐佐木幸綱、奥田亡羊、駒田晶子、田中拓也、俵万智の各選者が十編を選んで投票。

票の入った三十一編を予選通過作とした。

その中から三編を選んで投票し、得票のあった七編を一次選考通過作（○印）とした。

さらに一位、二位を決めて二編に投票。得票のあった岡嶋作、服部作、廣間作、西村作を二次選考通過作（◎印）とした。最終選考会議は八月四日にZOOMにより開催。ご体調不良のため佐佐木幸綱先生は投票によりご参加。その結果、選者全員が服部作を受賞作とすることで意見が一致。服部崇「極秘」を心の花受賞作と決定した。

予選通過作

安野ゆり子

大塚亜希

奥村知世

神戸貴雅

○小宮教子

◎服部崇

○笠巻睦

秦千依

松元雅子

川又和志

高鸞石

中村佳文

佐藤博之

谷ちえみ

松本実穂

◎廣間菜月

◎高良真実

◎西村康平

◎矢部雅之

金有美

福崎亨子

松本秀一

新留紀代美

佐々木寛子

中川弘子

増田満美子

蓬田真弓

◎岡嶋摩美

十亀弘史

伊藤亜佐里

誉田恵子

◎服部崇

○笠巻睦

秦千依

松元雅子

川又和志

高鸞石

中村佳文

佐藤博之

谷ちえみ

松本実穂

◎廣間菜月

◎高良真実

◎西村康平

◎矢部雅之

金有美

福崎亨子

松本秀一

新留紀代美

佐々木寛子

中川弘子

増田満美子

蓬田真弓

花の雨

マンション清掃

空色

宇宙のはしでドキドキしよう

極秘

東京悪事

血脈

クラシクアツプ

さびしいピアノ

カルデラの館

大木ではなくここは小棚木

狼春

細き窓

余韻

ずつと迷子

桃の水

五年の過ぐ

孤独ではない

海鳥

五月朴の木

菜の花明かり

印をつける

ダリア園まで

桜見上げず

水と小鳥と

山のいのち

極秘●服部崇

戦闘機の飛びゆく音に目を覚まし静かになれば髭を剃る朝
組織のデータをここに貼り付けることはできません。今は別れの
種なしのピオーネを食むいつまでもあなたの罪を宥せずにいる
かつては島の繁華街なりき銃声の止まざる午後を藪に入りゆく
流れきし遺体を弔ふための廟近くにエアープランツを掛く

この島のでこぼことした認識がジグソーパズルに括られた壁
数多あるなかに Love and Happiness と赤く書かれたランタンが浮く
力尽き空より落ちしランタンのひとつが枝にかかる木がある
大陸のサラミは何枚切りなのか中間線を越えて飛ぶ鳥

大抵の時間をひとり樹となりて立ちたる人のやうにはできぬ
この世から消えてなくなる日を思ふかもめが朝の体操をする
必要者、不必要者に分けられて我はこの地に死ぬもよからむ
何日君再来の流れる墓に近づきぬ我が約束を果たさむとして
お互ひに背中を向けて立つ像の蛙を拭ふ土砂降りの雨

彼岸花枯れてしまへり片隅に石の蛙は動かずにゐる
鴉鳥の潜く極秘の紙されば断ちて細かくゴミ箱に捨つ
役に立つやうに聞こえず幾本か骨の折れたる折りたたみ傘
雨傘の遠き記憶を手掛かりに板橋駅の改札を出る

もう一度君と飲みたし透明なポットに菊の花を咲かせて
満月の夜は来にけり漕がずとも空を流されゆくだけの舟

受賞の言葉——服部崇

心の花に入会以来、毎年、心の花賞への作品の応募を続けてまいりました。心の花の先輩や仲間みんなからは、応募作品に対し、毎年、批評や激励をもらい続けてきました。この間、東京、パリ、東京、京都、東京、台湾と転々と住む場所が変わりましたが、各地での歌会や勉強会など様々な機会に作歌に対する刺激を受けてきました。最近はおんラインによる遠隔からの参加の機会も増えてきました。こうしたこれまでの蓄積が今回の作品の受賞につながっているように感じています。

佐佐木幸綱先生、選考委員の皆さま、心よりお礼申し上げます。気を引き締め、一層、精進してまいります。



孤独ではない ● 矢部雅之

人々が右ゆ左ゆ歩み来る渋谷スクランブル交差点

すいすいと見事なまでにすれ違ふそのまま二度と会ふこともなく

こんなにも人がゐるのに誰一人私にぶつかる人などゐない

こんなにも人がゐるのに誰一人私にかかはることはないのだ

世界には一人私があるだけですべての他者は non player character

世界には実はだあれもゐないのだ私の他に人など誰も

押し寄せる人々人の誰ひとり私とぶつからぬのが証拠だ

神様は一人私のためだけにこの壮大な世を創られた

進化など無かった あつたかのやうに神が世界を創られただけ

「寒いね」と話しかけても一人 世界には私だけしかゐない

戦争が紛争が長引いてゐる 世界なるわが幻想のなか

盾として民間人が使はれて 私は記号として消費して

被災者が眠れぬ夜を過ごしてゐる その映像を私は視るだけ

被災地に私が寄付をする偽善 でもまあいいさどうせまぼろし

世界には私だけしかゐないのだ それでも祈る 他者の為に

韻律に言葉に乗せてゆくといふ独り遊びをしぼし愉しむ

詩情などいくら荒れても気にしない所詮独りの遊びにあれば

独り死ぬために私は生きてゐる 生きてきたやうに人は死ぬから

私は独り死んでゆくのだその時に世界はそつと消えてゆくのだ

「孤独死」なる言葉はどこか変である 孤独ではない死などあるか

花の雨 ● 岡嶋摩美

巢ごもりの虫戸をひらく催花雨の春をうながす口づけの音

誕生日、氏名を唱え肉体は診察カードに紐づけられる

しゃんしゃんと左手首のなかに鳴る神楽鈴あり 耳当てて聴く

右腕に広がる地図はすみれ色ゆくあてもない採血のあと

包帯と嘘は似ている ぐるぐるとほどこいてゆけば傷のあること

不老不死の繭に眠れる映画あり繭もたぬわれは老いつつ眠る

密談をするならば夜 娯楽室に真顔の大人が六人集う

十二時間眠れるわれを救い出すペロもグリムも書かぬおはなし

つぎつぎに話はすみ花殻を摘みながら聴くこぼさぬように

かくかくと傘折りたたみゆく医師の従属節で終わる言いさし

廃村の子守唄うたうトーンにて生存率を告げる老医師

順接の接続詞のみで語るべし辿り着きたい結末のため

死亡率ゼロでないこと念押しされ念押しされて印鑑を押す

照り翳る外待合に置かれてるポトスのように立ち尽くしたり

春の宵 検査日ごとに斜線引く手帳のなかに広重の雨

猫の背に足を投げ出し本を読む足裏あしうらより春を充電しつつ

群れるなら色のない花 質量をエナジーとして咲く雪柳

虹の匂い、遠くのチャイム降りだした雨が連れ来るものらうつくし

花の雨花に降らずに地に降るをひとあめごとに言の葉さやぐ

青紅葉ときおりさやぎ佇んで晩年へ向かう華やぎを待つ

ずつと迷子 ● 廣間菜月

責任は取らぬ大人に囲まれて口出しされてゐる吾が未来
あぢさゐに蕾つきそむ通学路青くゝるしき夏の初めの
教室といふ海原に言の葉は吾を離れて散りて消ゆるか
現実と理想の乖離まゝならず孝標女もかくは語りき
博士課程進学の是非説いてくるひと誰も皆持たぬ博士号
池の辺に枝垂るゝ藤に日は暮れて日々は何処にも定まらずあり
青空に筑波嶺しるく軒先のつばくらめ数多鳴きて飛び交ふ
十センチしか開かぬ窓 五階なる院生室に日は傾きて
「六十点くらいで良い」と論されて心の置き場探してをりぬ
見上げれば降り来るとし枝たかく俯いて咲くエゴノキの花
親つばめ孵らぬ卵あたゝめて或る日ふつりと姿消したり
深紅なる罌粟の花咲く丘に立ち魂こゝに埋もるゝかな
水浅みそこゝに土出づる田の水面に薄き三日月の影
為兼はその一瞬を生きてゐた吾が続きたるしきしまの道
木漏れ日のやうに重なる白躑躅落花散りしき道は続けり
黒板に読み札一枚貼られぬてずつと迷子の僧正遍昭
眠れぬ夜思ひ出でたることあり差し入る月に壁はあかるし
吾が授業上手くならねど生徒らの顔つき少し大人びてきて
泰山木おなじ位置なるその花の昨日より開きて雄蕊こぼるゝ
答へなき道を戦ひゆく者の集ひて吾も教室にゐる

東京悪事 ● 笠巻睦

阿佐ヶ谷に男待ちいてピスタチオぶちりと割れば真が落ちる

春キャベツひとまずしまい爪を塗り中杉通りで飲むギムレット

善福寺川公園の夜桜でケンタッキーの油にぬれる

オープンカーのシートに落ちた花びらをつまんで食めば埃が匂う

木は森に人は東京 悪事なすふたり身を寄す山手通りに

性欲を二つ持ちより恋とする 桜さくらと人の狂えば

オフショアのパーカーの紐囁んでいる男は軽く、ギアは5速に

青信号二〇〇〇CCを歌わせて国立府中へ疾駆しており

概ねは食と性欲 憎しみと時々愛を語って歌う

多摩川にさらされている日焼けあとおまえのロン毛がくすぐったくて

執着ほど美しくなく殺意ほど誠を持たず日野橋の風

桜夜の町に照らされ金属のシフトレバーが冷たくひかる

糞野郎と思いはしても東京で今夜ふたりは孔雀の儀式

「恋」だから明るい海も見たいよね稲村ヶ崎に沈む夕日を

砂浜に埋もれた鍵を探しおりおまえにひとつ真はあるや

愛などと言いつい訳はしない目の前のいかすみパスタがぬらりと光る

リーシユコードはボードとおまえを繋ぐものを私を決して繋がないでね

春キャベツ気になりだして今晚はロールキャベツを煮ようと思う

流行らないスカート捨てるほどのこと 葉桜の日はグラスビールを

内臓がおまえを探す午後二時に風現れてカーテン揺らす

五年の過ぐ ● 西村康平

墨を磨りまた墨を磨る泡沫の願いをひとつもつ者として
 先生はいつまで経っても先生で右へと下がる文字を書きおり
 春はまだ遠きにありて逆さまになりたる子どもと支える子ども
 cmより小さな単位を知りてより耳ある顔を描き始める
 始まれば終わる終われば始まる先生の墨のおりゆく様を見ており
 空の向こうに空のあるはず子どもらは今月の歌を口ずさみおり
 黒板は昨日のまま少年と少女の雲のような会話
 掌より大きな文字を書いており子らの世界を分かちておらず
 青みたる山に三方を囲まれて二校がひとつの学校となる
 統合を二回重ねし勤務校 歩兵のような職員の増ゆ
 夜と朝の間に青のひろがれり体で引きし一本の線
 見るよりも眺めていたい校庭の皐月の風を追い越す子どもを
 閉じられし学舎からは届かざるものとなりたる校歌校訓
 幼きものに手を引かれつつ駆けており皐月の風を我のものとする
 低学年は高学年のように高学年は低学年のように育てたし教職に就き五年の過ぐ
 同じ場所に進み続ける苦しさよ紙を切りゆく線を書きたし
 両側を水田に囲まれ帰りゆく幼きものを長く見ていつ
 細き線と太き線とに囲まれて文字は仄かな奥行きをもつ
 実線と虚線のしきりに入り混じる師はいつまでも遠きひとりよ
 分区と分区を繋ぎとめいる蛍橋区切つて生きることを思いぬ

あたらしい朝 ● 小宮教子

少しだけ窓を開けたり病室の影の重さを逃がさんとして
「また」と言い手を振ることは不確かな明日を祈る最小単位
月あかりとどこかぬ夜のシーソーにふたり別々の祈りをしたり
マーカールのピンクの嘘の蛍光であなたの声にラインを引けり
生まれ月葉月はつかに葉を揺らし葉を濡らしつつもの思うなり
サイダーはあなたを祝うためにある透けたボトルに立つ朝の虹
窓際のペパーミントの葉を摘みてモロッコの坂の日暮れを思う
青いあおい酸素のいろの水族館ひとはこころを泳がせにくる
サングラスの分だけ青の濃さを増す湖に来ており真冬の午後にも
もういないひとに届ける花だからひかりの中を運ばれてゆく

安野ゆり子

夏の犬桜

三つ折りの園内マップさらに二度畳み膨らむ右のポケット
サガリバナ昨夜ひらいたこと知らすそだけ掃除されてない路
二秒後に萼落ちてくる木の下に結句の出ない人間が立つ
暴れない順に遠くに配置されナースステーションへは二度曲がる
〈行き場なき書類〉とテプラ貼つてあるファイルは左から三番目

大塚亜希

いつかへの距離

ほんとうの眠りは深い群青の色 目交に訪れを待つ
頭痛薬のうっすら赤く飲み込めば浸透しゆく春のあけぼの
幾たびも花を捧げてモノクロの夢に真白な祖母を見送る
雪消水の上にもまた降る春の雪際立つ白を踏むに迷わず
滑り止めの砂は溶けずに雪解けが進み黒ずむ札幌の春

奥村知世
野球部の母

野球部の母のオーラのある人がここにこそしてテキパキ話す
「練習や遠征も多くありまして親御さんにも覚悟がいります」
ユニフォーム借りてベンチで応援をする息子、そんな声が出るのか
二週間寝かせてある朝ひと息に書き込む入部届 息を吐く
野球部の母として行く小雨降る卯月の校庭、息子が走る

神戸貴雅
東京症候群

夕暮れに全てのビルが太陽を眺めるようにならぶ東京
それぞれに何を隠していたのだろう ちらりほらりとマスク転がり
久しぶりに表舞台に立つような一人深夜の横断歩道
本物の夜より少し明るくて バケツの水に映る闇夜は
あんな事もこんな事もみな去りゆきて一つ朝陽の残りて眩し

十亀弘史
マンション清掃

箒手にイントロピーの増大と闘っている春風の中
夏落葉、蟻・蝉・蚯蚓、鳥の糞 命にぎわう八月を掃く
お互いに過去は言わないシルバーの労働者たちきつぱりと今
花を買ってきたらし青いドアの前黄の花びらの二ひらが散る
これは多分こどもがつくったモノUMENT小石と小枝を掃き残しておく

伊藤亜佐里
空色

掲示されたクラス名簿に子を探す女子は男子の名前の後ろ
児童家庭調査用紙に記す春 男か女か保護者が選ぶ
半分こは難しすぎるエクレアやシュークリームや人間の性
「代表は男子で副は女子がやる きまつてないけどそうなんだって」
雨までは落ちない曇天 北陸の人だけ晴れという空見上げる

宇宙のはしでドキドキしよう
誉田恵子

ひとびとが武器をつくって戦いをはじめると不思議 詩をよむ不思議
したい子としたいくない子と、した人としなかつた人の戦いごっこ
群れながら街をぼくぼく歩くとき春の日差しを運ぶようだね
セイシャイン、アルバイトのみ日本語の会話を聞いた夜のドトール
ひとの世の暮らしは苦手だとしてもトーストならばぱりつと焼ける

秦千依
血脈

子を産めば広がってゆく血脈の被爆四世五世と街は
ウクライナの春を知らずに眠る祖母明日つくしを摘みに行こうか
平和記念資料館前に風渡りいろんな国のいい匂いがする
八月六日の雲のパネルをじつと見るもうすぐ息子を連れて見に来る
夾竹桃がわしゃあわしゃあと叫ぶ街悲しくて強い祖母がいた街

松元雅子
克蘭クアップ

はじめての父の死に顔 窓越しの雨はこの世をひからせて降る
「もう少し待ちますか」 医師の気遣いに上書きされる死亡時刻は
入学式まであと八日米寿叙勲まであと二か月 さういふひとで
親は逝き子は老いてゆくうつそみに咲きしづもれる一本桜
ゐないけれどゐるゐるけれどゐない春いまだ再生ボタンは押せず

川又和志
さびしいピアノ

こまっしやくくれた顔して弟と弾いていた娘がいなくてさびしいピアノ
やわらかなヒゲの伸びたる子の欠伸ぽわーんと秋の雲を吐き出す
無理をして人に好かれることはないツユクサに言ったが息子には言わず
タンブラーの氷がとけてなくなつて一緒にご飯を食べるのが家族
父われの賞味期限は切れている娘は彼が一番となり

高鸞石

カルデラの館

湖面には鐘の音ひびき硝子器の梨の裸は陽に染まりゆく
濁りたるカメラの奥の被写体の名前も知らず湖には光
硝子器のチーズの白き徹清し 一族という幻のなか
湖も山も遺伝子グレイのようにねじられて暖炉の中に燃えている地図
壊れたる一本の櫛わが胸に抱えるばかり暮れゆく湖水

中村佳文

大木ではなくここは小棚木

ノックするキャッチャーフライの高さにて監督の技量問われておりぬ
バントする代打を告げる（大振りの大木ではなく）ここは小棚木
「バントして転がるボールを見るんだぞ一塁アウトが君の勝利だ」
一死二塁次打者はインド、声援のあだ名が相手投手をゆさぶる
速球にバントを決めた小棚木よ君を「犠打」とはスコアに書かず

佐藤博之

徂春

陰口が小さき町の角に立ち藤棚を春霞が覆ふ
人影のなく少年の泣聲の聞こえぬ町に椽とちの花咲く
猫の戀、人の不遇の聲ばかり我が住む街に喧しけり
僧が眼を強く見開き暁の梵鐘の目を眞つ直に撞く
本堂の厚き讀經の奥におはす秘佛の厨子の裡を這ふ蚰蜒ゲヂ

谷ちえみ

細き窓

玉となりとどまる雨と光を曳き決まりいしごと落ちゆくしづく
月曜の朝の陽が射す処置室へ散髪したての主治医につづく
地平線をつまめるごとく山が見ゆ一人にひとつ細き窓ある
残さること思いみる夜もあらむ足早に去る夫を見送る
ささやかなわがまま生まれふりかけをふりてお粥を完食したり

松本実穂

余韻

ためらふを指に知りつつ抜くコルク　ワインの息のしうと漏れいづ
とつくどくと鼓動のやうな音を立てグラスに注ぐ CLOS DE LA ROCHE 2009
十五年をわれの老いきて葡萄酒は眠れるままに熟成したり
目を瞑ればチェンバロの音、鳥の声　香りの奥へわがのまれをり
ほろほろとこころほどけて浮遊する霧立ちこむるブルゴーニュの丘

高良真実

桃の水

桃の缶に水満ちてをり甘き水いまふるさとの下水を流る
湯浴みして流す湯ははや冷めにつつ地上の水のめぐりの一部
女より息子産まるる不思議さもまた友人に告げざりしこと
体内に胎児のごとく育ちたる腫瘍もあれば切り出されをり
もやし育つ闇よ売り場の明るさより取りだして胃のくらやみに入れ

金有美

海鳥

首のなき鳩の骸が落ちていて、上手によける朝の人群れ
われもまた群れの一人と思いつつ今日をはじめ靴音しずか
仰向けに寝息をたてる人形のごとき骸よ虹色の羽根よ
この鳩のある一瞬に極まりし命ありしか、わが生くる日に
海鳥の低き滑空をみつめおり　過去かの鳩もそうしたように

福崎享子

五月朴の木

両の手はベッドに縛られ風の中の母は自転車こぎ続けてゐる
建付けのわるき開き戸あいてゐて一重まぶたの闇がのぞけり
その穴とちやう言ふてんのにその穴へ通さむとする堅き右腕
怒りもて母の仙骨たたく時仙骨は鳴るつづみのやうに

「いまなんじ」繰返し問ふひとと居て更けゆく夜の遠ほどとぎす

松本秀一
菜の花明かり

道に咲く菜の花を見て思ひ出す、わたしのなかの菜の花明かり
真裸にされて突つ立つ楠はどんな思ひか推し量られず
鳩胸のやうな羽から殻破り白き芽の出づ、大気にふれる
山沿ひの道の斜面に蜜蜂の箱一つあり祠のごとく
赤き血はからだを巡る、ゆつたりと水も巡りぬ早苗の空を

新留紀代美
印をつける

線を引く印をつけるまっすぐに釘打つためにまがらぬように
勝ち負けの問題じゃない口つぐみ三日寝かせて言葉を選ぶ
太き糸絡まぬようにたぐりよせとどめの一針深々と刺す
逃げ道をつくらぬように筆圧を強くして書く一言一句
争いはこんなところに始まって終わる兆しはみえない今日も

佐々木寛子
ダリア園まで

秋の日の川のひかりに沿いながら車走らすダリア園まで
あずまやの前を斜めに過ぎりたり蝶一片の時の剥落
出勤をしない私に蜂たちの羽音が聞かす労働の唄
葉の上でつがいたるのち緑金のコガネムシ死を産みつけに来る
秋草の岸を夢にて歩みしが目覚めてもなお続くさびしさ

中川弘子
桜見上げず

箸をまだ使えぬ息子 服薬の後のお茶飲む手つきの早し
間に合つてトイレにきちんと行けたこと喜び褒めれば息子もよろこぶ
雨音が強まり地平の彼方から舟を運んでくるような雨
順序では親が先に逝くこの世での親なき後の吾子を思えり
障がいのある子の歌を詠うこと罪のごとくも舞う花吹雪

増田満美子
水と小鳥と

急流に立ち居るごとしネガティブな気持ちぐるりと反転すれば
大瑠璃の声と知らせる人の無くひとり聴き入る静の谷に
軽やかに幾つも谷を越えてゆく鶯の生む歌の旋律
海までの距離を思ふな樟の葉が飛んでゆく歓喜にみちて
正しさを求め迷ひて蛇行する溪流はきつと若き白龍

蓬田真弓
山のいのち

去年こぞの春ともに仰げる奥岳の雪溪かがようこの春もまた
「支えられていたのは私の方だった」ふいに気付きぬ山と語れば
ふきのとう全山に春よびよせて飛び出してくる口上陳べつつ
雪解けの大平川よ多弁なれ 遅き春ほどきらめき乗せて
熊になり羚羊になり森をゆくダイダラボッチよ寂しくないか

第二十四回「心の花賞」選後評

服部崇「極秘」を推す ● 佐佐木幸綱

票で参加させてもらった。

選考会の結果、今回の「心の花賞」は服部崇「極秘」二十首に決定。作者の服部君

は数年前から台湾に在住している。現在のところ、日本と台湾との関係は複雑で、日

本は台湾に大使館をおくことができないら

しい。組織図を見ると公益財団法人日本台湾交流協会なるものがある、服部君はこの副代表らしい。

作品を読んでゆくことにしよう。象徴的な作が多く、具体的な出来事、作者の行いや等々作品から読みとることはむづかしいよ

今年は各選考委員のネット投票の最終段階に入ったところ、小生が暑さにやられてダウン、私だけZOOMの選考会を欠席、投

うである。作者も作品化するに当たって、現実からは二歩も三歩も距離を置こうとしているように読める。

戦闘機の飛びゆく音に目を覚まし静かになれば鬚を剃る朝

満月の夜は来にけり漕がずとも空を流されゆくだけの舟

冒頭の作と最後に置かれた作である。この最初と最後の作は、作者のふだんの朝と夜を表現しているように読める。毎朝のように戦闘機の飛びゆく音をさましているのか。そして、自然の流れに身をまかせるように迎える一日の終わり。「漕がずとも空を流されゆくだけの舟」に、個人を越えた大きな力に身をまかせざるをえない台湾の状況がうたわれている、そう読んでいいだろう。

「島」と呼ぶことで、島国としての台湾をうたった歌がある。

かつて島の繁華街なりき銃声の止まざる午後を敷に入りゆく

この島のでこぼこした認識がジグゾーパズルに括られた壁

二首で「島」と呼ばれているのは台湾の

ことだろう。かつての繁華街が現在は敷になつている。この歌でなぜ、止まざる銃声が聞こえるのか。私には分からない。二首目の「でこぼこした認識」は過去と現在、そして過去が、十年前の過去、二十年前の過去など一種類ではないことを表現しているのだろう。十年前も二十年前も変わらない現代日本のように、のっぺりとした時代を過ごしている国に住んでいる者には理解しにくいところだろうと思う。

組織のデータをここに貼り付けることはできません。今は別れの

鳩鳥の潜く極秘の紙されば絶ちて細かくゴミ箱に捨つ

日本に住んでいる私たちのように、無防備に日々を過ごしてはゆけないらしい。仕事上のことで極秘の文書をあつかうこともあり、歌の中でも明確になしえない、そんな事情もあるのだろう。

六首を読んでみたが難解である。これは、現在の台湾そのもの持つ難解さでもあるのだろう。

じつは私は、台湾に一度しか行ったことがない。しかも大昔である。まだ二十代の

ころ河出書房に入社した私は、会社の仕事で、ベトナム戦争の取材をかねて東南アジアのいくつかの國をめぐり、帰りに台湾に寄った。そんな大昔を思い出す。

問いを持つ作品●奥田亡羊

選考に際して、絶対的なものではないが、個人的にいくつかの基準を設けている。生老病死や喜怒哀楽を超えた何かに触れること、風格、大きさがあること、次へと向かう勢いがあること、そして謎があること。選考の後半、候補作を絞る段階で、その基準のいずれかを満たしている作品を自然と残す結果になっているように思う。

今回の心の花賞受賞作、服部崇「極秘」は台湾が舞台である。中国との不穏な関係が背景にあるのだろう。戦闘機が飛んできたり、銃声が鳴り響いたり、作品に時代的・地理的な広がりがある。主人公が何の仕事をしているのかは明かされないが、組織の中で必要・不必要という評価にさらされているらしい。作品のテーマは大きなものに巻き込まれていく焦燥感、無力感だろう。

主体が不明瞭であるため、対象に正対はせず、ある虚無感を抱え込む感じがあるが、それも含めて現代を生きる人間存在の不安定さを突き付けてくる。心の花賞にふさわしい読み応えのある作品だった。

注目作をあげればきりがなが、服部作以外では、とくに西村康平「五年^{ごねん}の過ぐ」や矢部雅之「孤独ではない」に注目した。

西村康平作は教師の作品。生徒を見る眼が、そのまま世界の新鮮さを発見する眼になつていて新鮮だった。生徒の動きを細やかにすくい上げ、また見ること、眺めることの違いにも意識的である。何より「同じ場所で進み続ける」というテーマの提示が見事だった。子どもは成長し、進級・卒業していく。それに対し教師は同じ場所を進み続けるしかない。こうした思索の柱が立つと作品の輪郭が明確になる。

矢部雅之作は今回の応募作中、いちばんの問題作だった。私は選者賞としてこの作品を選んだが、それを決める最終選考選考会議の中で、ある選考委員からは、矢部雅之の署名がなくてもこの作品を選ぶかと問われた。またある委員からは、過去の矢部

雅之の瑞々しい作品を知っているだけに、私はこの作品を認めたくないという厳しい発言もあった。

だが、そうした反対意見を考慮しても、矢部の作品には素通りできない何かがある。内容は単純だ。世界は神が私のために創った幻想で、この世に私以外の誰も存在せず、戦争もなければ災害もない。短歌もまた独り遊びに過ぎないという。自分が現実なら世界は幻、世界が現実なら自分は幻、そんな危うい認識の上に連作は成り立っている。希望があるのか、ないのか、まったくもつて謎めいた作品だった。

私はこれを佐佐木信綱の短歌観に対する反措定ではないかと考えた。歌は美しいもの、歌は愛するものといった信綱の短歌観の裏返しのように感じたのだ。もちろん信綱の語る短歌もまた幻で、だからこそ現実と幻を結ぶ言霊の問題が重要になつてくる。信綱の短歌観をそのまま自分の歌に接ぎ穂することは難しい。それを継ぐために、幻とは何か、ひとたびはその虚ろを潜在に抜ける必要がないか、矢部はそれを私たちに問いかけている。

あなたの伴走者 ● 駒田晶子

今年の「心の花賞」は服部崇「極秘」に決定した。予選から圧倒的だった。作者の抱えているモヤモヤの存在の重たさ。連作の一首目「戦闘機」から読者をグツと引きつける。「何日君再来の流れる墓に近づきぬ我が約束を果たさむとして」この一首、どこの誰の墓なのか、誰との約束なのか。一切、明かされない。連作の中で作者が抱えている具体がわからず、読者は「極秘」の重さだけを手渡される。こんな連作の作り方が、あるのだ。独自の世界の切り取り方で短歌を構築してきた服部さんの「心の花賞」の受賞、嬉しいです。駒田晶子賞は岡嶋摩美「花の雨」に。病気を抱えながら暮らしている作者の日常が、一首一首から、くつきりと浮かびあがってくる。「しゃんしゃんと左手首のなかに鳴る神楽鈴あり 耳当てて聴く」「密談をするならば夜 娯楽室に真顔の大人が六人集う」一首目は、何らかの器具が手首に埋め込まれているのだろうか。「神楽鈴」が、うまい。

二首目は「密談」「六人」がポイント。病院の「娯楽室」に集まり、数人で話さなければならぬ状況が明確に伝わってくる。どちらも深刻さが漂わないよう、慎重に言葉が選ばれていて、効いている。比喩表現が多く用いられる連作から、ファンタジックな世界に憧れながら、リアル世界に根を張って生きる覚悟が伝わってくる。安野ゆり子「夏の犬桜」は、自分から離れて自分を眺める視点が明確だった。「二秒後に落ちてくる木の下に結句の出ない人間が立つ」。奥村知世「野球部の母」。軽妙な詠み口で、日常生活での作者の立ち位置を切り取る。「ユニフォーム借りてベンチで応援をする息子、そんな声が出るのか」。伊藤垂佐里「空色」。男か女か、しか定められていない性を考える連作。「児童家庭調査用紙に記す春 男か女か保護者が選ぶ」。松元雅子「クランクアップ」。父の他界を撮了として捉える連作。「はじめての父の死に顔 窓越しの雨はこの世をひからせて降る」。川又和志「さびしいピアノ」。変化してゆく家族のかたちをユーモアを交えて詠う。「真っ直ぐに引かれた線をとぶ蜻蛉

四枚の羽に風をおさえて」。谷ちえみ「細き窓」。入院生活を送る病室から見えるものを丁寧に掬い取っていた。「雨音のような語りが聞きたくて未明のらじる文庫を開く」。矢部雅之「孤独ではない」。今までの矢部さんの作品は、私の一部になっている。これからを、また、読みたいです。佐々木寛子「ダリア園まで」。ダリアの咲いている園内の様子と外の世界との結びつきが新鮮だった。「暗紅のダリアに潜む劫火ありソドムとゴモラを滅したる日の」。中川弘子「桜見上げず」。障害のある息子を詠う自分への視線が重く、印象に残った。「気がつけばリモコンで叩き続けたる手の甲が赤く腫れあがりたり」。十年近く「心の花賞」に携わらせて頂き、結社の存在意義を実感している。ひとりひとりの署名の重さは、積み重ねてきた作者の作品の時間の嵩そのものだ。作者自身が何かを突きぬけたような20首に出会えたとき、とても嬉しい。詠み続けなければ、たどり着けない地点が、きつと、ある。結社の読者（仲間）は、伴走者なのだ。

署名の力 ● 田中拓也

第二十四回「心の花賞」受賞作の服部崇「極秘」は署名の力が連作の世界観を構築する大きな力となっている。「心の花賞」は各総合誌がおこなっている新人賞とは異なり、選考委員は署名のある連作を読み、選考に当たっている。今回の服部の連作は、作者が台湾に在住し、公的な任務にあたっていると「読み」の磁場を踏まえた時に、その作品が光彩を帯びてくる構造になっている。

・大陸のサラミは何枚切りなのか中間線を超えて飛ぶ鳥 服部 崇

連作の中で最もテーマ性の強い作品を抄出した。この作品を無記名で読むと、解釈は読者によって間違いなく分かれると思う。だが、服部崇という署名が入った時に、この作品は複雑な歴史を抱える台湾の持つ重層性を描いた秀歌として光り始める。集中には次のような作品もある。

・雨傘の遠き記憶を手掛かりに板橋駅バンチヤオの改札を出る

作品の背後にどんな事情があるかは連作を読んでも、はっきりとはわからない。だが、それこそが「極秘」というタイトルに込められた作者の意図と言えるだろう。署名・連作のタイトル・作品が一体となったスケールの大きい連作である。

池の辺に枝垂る、藤に日は暮れて日々は何処にも定まらずあり 廣間 菜月
十センチしか開かぬ窓 五階なる院生室に日は傾きて

今回、選者賞に選んだのは廣間菜月「ずつと迷子」である。大学院での研究に取り組みつつ、教員として働く自身の葛藤を四季の巡りの中で丁寧に詠んでいる点に心打たれた。また、文体の面でも旧仮名遣いを駆使し、新しい文体の獲得を模索している点にも注目した。今後も古典和歌や近現代短歌を読み込み、独自の世界を切り拓いていってほしい。

墨を磨りまた墨を磨る泡沫の願いをひとつもつ者として 西村 康平
統合を二回重ねし勤務校 歩兵のような職員を増ゆ

西村康平「五年の過ぐ」は小学校に勤務

する教員の想いを独自の視点で詠んだ力作。特に書写の場面を通して、自身の想いを表出した作品が光彩を放っている。また、「統合を」のように自身の置かれた立場を俯瞰する視点で詠んだ作品にも注目した。

以下、予選通過作品の中で特に注目した作品を抄出しておきたい。

夕暮れに全てのビルが太陽を眺めるようにならぶ東京 神戸 貴雅
夏落葉、蟻・蝉・蚯蚓、鳥の糞 命にぎわう八月を掃く 十亀 弘史

子を産めば広がりがてゆく血脈の被爆四世 五世と街は 秦 千依
神戸・十亀・秦の作品はいずれも二十首を一作品として、一つの主題を独自の視点で詠もうとしている点に注目した。

二十首を貫く主題と構成員、そして一首一首の完成度を高めるためには作歌を継続することと様々な歌集を読むことが大切と思う。自戒を込めつつ、感じたことである。

それぞれの魅力●俵万智

服部崇「極秘」は、心地よい緊張感と芯

の部分が見えないもどかしさと、それゆえの、いやそれでも言葉にしておきたいという切迫感が伝わってくる一連だった。戦闘機（非日常）と、髭を剃る（日常）の取り合わせで始まり、ただならぬ状況にあることはわかるが、何がどうと細部を書くことを躊躇っている感じがあって、深刻さを物語る。そんな中、エアープランツやジグソーパズルが象徴的に機能して、読む者の想像力を刺激する。「力尽き空より落ちしランタン」や「骨の折れたる折りたたみ傘」を、作中で「君」と呼ばれる人と重ね合わせて私は読んだ。タイトルの一首は、万葉集「鳥の潜く池水心あらば君に我が恋ふる心示さね」の本歌取り。鳩鳥が潜った深い池の底にある極秘の文書を、極秘ゆえシチュエーションにかける。本歌にあつた「表面化させたい」という願いと真逆の行為だ。その内容は読者にも明かされず、タイトルとしての「極秘」が全体を覆う仕掛けが秀逸だと思う。「必要者、不必要者」や「漕がずとも空を流されゆくだけ」に滲むやや投げやりな無力感にも惹かれた。

俵賞は笠巻睦「東京悪事」。オーブンカー

で飛ばして、食べて、飲んで、寝て、海に行く……その二人の時間を、無邪気に恋愛とは呼べない（呼ばない）感覚が一連を貫いて、もがいている感じがいい。「真が落ちる」「埃が匂う」といった結句、「男」「糞野郎」「おまえ」と呼ばれる相手、「性欲を二つ持ちより恋とする」の一首に顕著な、身体と心の関係。作者の描く生き生きとしたディテールを読んでいると、それを恋愛と勘違いするのが青春ではないかとも思うのだが、徹底して疑っているところが素晴らしい。二首目で春キャベツをひとまずしまつて、十八首目で思い出してロールキャベツにするという構成も面白い。一人の日常を象徴する小道具として効いている。

以下、紙幅の許す限りコメントを。岡嶋摩美「花の雨」は比喩の見事さが抜きんでていた。採血のあとを「地図」、手帳の斜線を「広重の雨」。それぞれの確で詩的であるだけでなく、一首の他の語とも連携している。安野ゆり子「夏の犬桜」は小さなことにひっかかる感性が光る。神戸貴雅「東京症候群」は、勢いと表現への欲を感じた。壁面タイルやプッシュ型ハンドクリームの

歌など、比喩も冴えている。小宮教子「あたらしい朝」は、人を見送る心の繊細さに、胸を打たれた。誉田恵子「宇宙のはしでドキドキしよう」は、弾むような楽しい言葉遣いが魅力。社会性もあつて、その裏打ちがいい。セイシャインが正社員であると同時に「Say Smile」であることに気づいてハッとさせられた。高良真実「桃の水」には、同じものがAからBへ移るとき本質はどうなるのかという深い問いかけを感じた。金有美「海鳥」は、鳩の死骸から思考を深めてゆく軌跡が迫ってくる。福崎享子「五月朴の木」は介護の一連で、リアルな中にも独特の表現が光る。仙骨の一首が忘れがたい。秦千依「血脈」は被爆した祖母を中心に据えた連作で、次の一首が鮮烈だった。「バス乗り場の黄色い案内板嫌い平和公園行きとか来ない」

月詠のネット投稿フォーム導入について

「心の花」編集部

「心の花」の毎月の歌稿の投稿は「心の花」原稿用紙を用いることになっていきます。しかし、昨今の郵便事情の変化や多くの会員の方の要望もあり、従来の「心の花」原稿用紙での投稿方法に加えて、スマートフォンや端末からの投稿を可能とする「投稿フォーム」も併用して導入することになりました。

投稿フォームを利用する場合はスマートフォンや端末で左記のQRコードを読み取り、必要事項を入力してご投稿ください。また、「心の花」のホームページのお知らせ欄にも投稿フォームのアドレスを掲載いたします。

もちろん、従来通りの原稿用紙での投稿も可能です。手書きでの投稿を希望する場合は今まで通りの投稿方法と変わりません。

- ・ 短歌作品のメ切日は、毎月二十五日とします。掲載は三ヶ月後の号となります。
- ・ 投稿した作品は選者の選を経て掲載されます。誌面には添削後の作品が掲載される場合もありますので、ご了承ください。
- ・ アルファベットや数字の表記は編集の際に変更する場合があります。



2024年11月から
12月まで有効